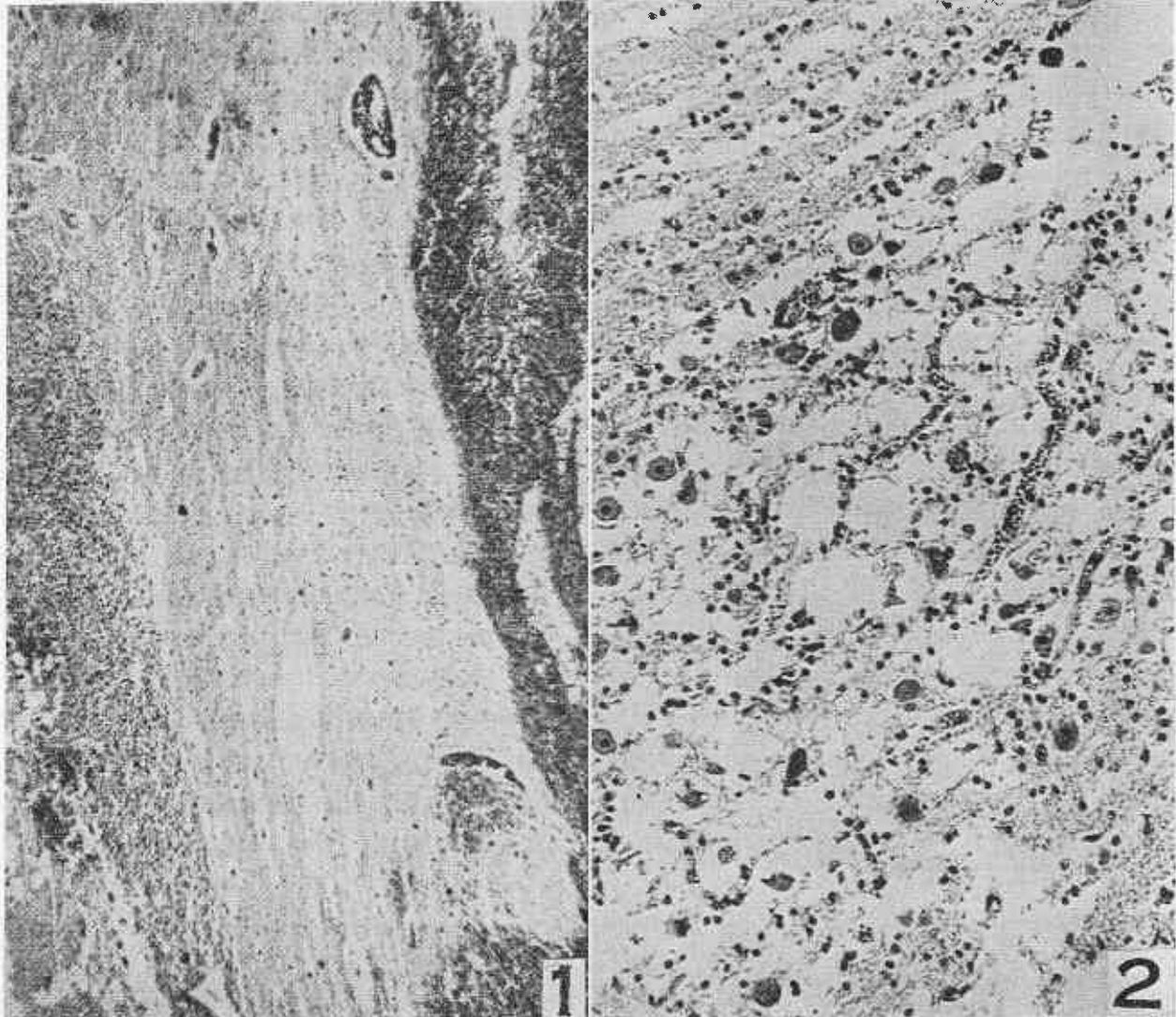


日 生 研 究

第 9 卷 昭 和 38 年 3 月 第 3 号



牛 の 小 脳 出 血

家畜衛生試験場本場出題・第2回獣医病理学研修会標本 No. 16.

昭和35年11月上旬から翌年1月上旬にかけて、長崎、佐賀、山口の3県下の一部に発生した哺乳犢の育成飼料中毒例である。生後3日目から問題の飼料を給与し、第1日 400g、第2日 600g を与え、3日目に突然転倒し興奮、間代性痙攣、眼球振盪を現わし斃死した。この標本は小脳で、肉眼的に後域の軟膜面に拇指頭大の血液凝塊を付着し、実質にも大小の出血巣が認められた。大脳でも前頭域、間脳、脳幹の各所に粟粒大の出血巣が多発

している。顕微鏡下では出血(写真1)、プルキンエ氏細胞の変性、脱落がみとめられ、部位により、それらの変化が著明で、毛細管充盈、壁細胞の腫大、グリア細胞の増数が認められる(写真2)。他の領域における出血巣もこれと全く同じで、中枢神経病変として、毒物による血管壁変性、破綻性出血、反応性血管壁細胞増殖、実質粗性化、脳軟化症などの一連の変化が認められた。